

連載⑦

内海善雄の (ITU元事務総局長) やぶ睨み 「ネット社会」論

心理作戦が必要な国際選挙 金銭がすべてではない

サッカーやオリンピック招致などに、多額の不正な金銭が動いたという。国際選挙で金が動くのは当たり前だと考える人が多いと思うが、そんなに汚れた世界ばかりでもない。

選挙運動をしなかったカナダが圧勝

「国際選挙では公職選挙法がないから、やりたい放題」と、入省間もない研修の時、国際通の先輩から面白おかしく聞かされた。その時は、まさか三十数年後、自分自身がその国際選挙に立候補させられる運命とは思っていませんでした。

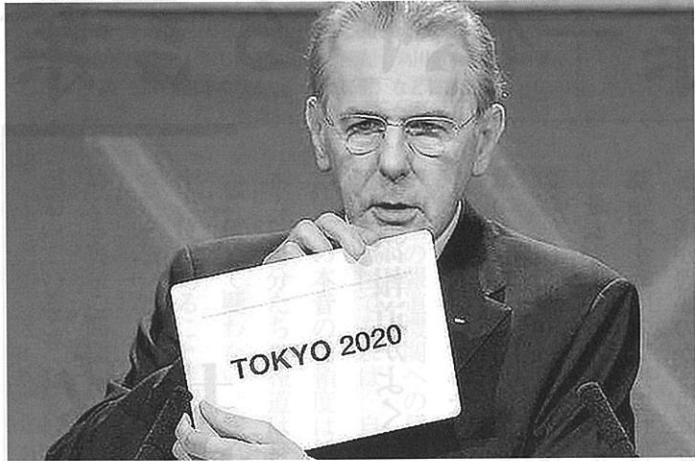
一九九七年、私は、ITU（国際電気通信連合）事務総局長に立候補した。当時、橋本龍太郎総理は、ご自分が日本人として初めての国連機関のトップ（WHO事務局長）を実現させたと自負されていた。その総理から、

「シオン会場を去るカナダ代表は、「ミスター・ウツミ、明日の投票は辛い」とひと言、見るも哀れであった。

結果はカナダの大勝。要するに秘密投票をした各国代表は、米国のやり過ぎに反発し、カナダに同情したのだと思う。日本代表がどちらに投票したのかは、上司であった筆者も知る由がない。

選挙プロの誘惑

数年後、筆者が事務総局長に立候補し、選挙活動を開始すると、「応援してやろう」と



神聖なイメージが損なわれてしまった……

「相当なものをプレゼントしなければ当選できない。君の場合は電気通信だから、交換機になるのかな。高いものになるぞ」と言われた。

私は、「ハイ」とは答えたものの、内心では、「そんなことはできるわけがない」と思った。それは、経済的な理由もさることながら、その数年前（一九九四年）に京都で開催されたITU全権委員会議での米国とカナダの選挙戦を見ていたからである。

ITUでは、四年ごとに全権委員会議が開催され、トップである事務総局長をはじめ、次長や局長など五つのポストの選挙が行われる。各国一票の秘密投票である。オリンピック開催地の決定と同様、秘密投票だから誰に投票したか、投票者本人以外は誰も分からない。しかも、二百に近い加盟国の半分ぐらいは、四年に一度だけ会議に出てきて面識のない候補者に票を投じる。

米国とカナダは、電波局長に候補者を出した。両候補とも名前の知れた立派な候補であった。従来から米国が独占していたポストのため、米国当選が当たり前と思われていたが、予想に反してカナダが当選した。

「よろしく」と気楽に応じると、すぐさまコンサルタント契約書を送り付けてきたのには驚いた。また、「米国で悪評が立っているから対策をしてやる」と、郵政省関係者に提案してきたその道のプロらしき者もいた。当然、これらは皆、丁寧にお断りをした。

とにかく候補者本人や、政府高官が各国を訪問して、候補者の抱負を知ってもらうという地道で素朴な選挙運動を行った。

ミネアポリスで開催された選挙が行われる全権委員会議では、最有力対立候補と目されたインドネシアが、まるで米国大統領選ビデオのようなプロが作成したビデオの放映と候補者の娘たちのダンスを上演する派手なレセプションを開いた。一方、日本は、意図的にスピーチもない、単に皆が歓談するだけのレセプション。結果は、対立候補に大差をつけての当選であった。

絶対当選しなければ許されない日本

その過程で悩ませられたのは、実は、国際選挙とはかく金を使い派手に行うべきだと考える日本の応援、特に関係業界からの応援であった。「日本人がITUのトップになると日本企業が有利になる」と反対キャンペーンを張っている欧米と戦っている時、業界から各国への働きかけは、まさに敵の主張を証明するも

米国主席代表が、会議の議長をしていた筆者に「どうして負けたのか分からない。支持を約束した国は圧倒的に多かったのに」と嘆いた。一方、カナダ代表は、「奇跡が起きた。ほとんど選挙運動をしなかったのに」と、嬉しげであった。

実は、筆者は人知れず、この選挙の結果を予想していた。それは、議長として各国代表の空気を肌で感じていたからである。

米国は、国務省が強力に各国政府に外交ルートで支持要請を行い、口上書で約束をさせた。わが国も東京で支持を約束させられた。候補者は、事前に開かれたITUの「電波割り当て会議」の委員会の議長もやり、各国にその有資格者ぶりをアピールした。全権委員会議中は、米国代表団は手分けして毎日、各国代表を接待した。そして、選挙日前夜、京都国際会議場の広い庭園で火花を打ち上げる大レセプションを挙げて盛り上げた。

一方、カナダは、外務省が全く協力せず、候補者のプレゼンスもほとんどなかった。時々、候補者目らが知り合いの各国代表と個別に会食するぐらいで、その数も十カ国もなかっただろう。選挙前夜、米国主催のレセプ

同然になりうる。

さて、十年近く後、日本からITUの他の重要ポストに候補者を立てた時に、この経験アドバイスすると、「非協力的だ」「他の当選を望んでないのではないか」などの批判を受けた。

日本では、一度立候補すると是が非でも当選しなければならないという圧力がかかり、周囲も必死になる。やれることは、すべてやらなければならない。しかし、ITU選挙の場合は、そのような国は少ない。どの国も選挙活動をあまりやらないのが通例だから、いわゆる日本式のやり方は突出する。

国際選挙は、ITUやIOCのように秘密投票もあれば、公の事前審査があるもの、理事国だけで公開投票するものなど、千差万別である。従って、ITU選挙のやり方が他の場で通用するわけではない。しかし、コンサルタントを雇い、金をかけて派手に、そして賄賂をつかまなければならないという一般的な考え方も普遍性がないと思う。



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大(現大阪大学)法学部卒業。66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は一般財団法人「協力」理事。IEEE名誉会員。